

# 特別支援教育を学ぶ本学学生のための「教育支援データベース」の開発（第1報）

堀江幸治

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2015年11月12日受付、2015年12月17日受理）

## 要約

特別支援教育を学ぶ本学学生のための教育支援データベースを開発するための基礎研究として、学生の学習過程におけるインターネットの活用の実態や、インターネットを活用する上での学習ニーズについて、アンケート調査を実施した。

調査の結果、学生の学習状況や学習ニーズには以下の特徴が見出せた。①学生自身が特別支援教育を受けた経験がほぼ皆無であるため、障害児の実態把握や教育場面の理解・イメージ化が困難である（したがって、障害をテーマにした動画や放送番組および近郊の障害者支援活動に対するニーズが多い）。②学生がインターネットで情報検索を行う際に、適切なキーワードが思いつきにくい。③上位学年では、公的機関の記事や学習指導案データベースなどへの検索を積極的に行うが、ヒットした情報が自身のニーズを十分に満たせるものなのかどうかの判断が難しい。

## 目的

特別支援教育を学ぶ者にとって、特別支援教育に関する情報を入手することは必須である。ただし、特別支援教育は比較的新しい教育領域であるため、全国各地で特別支援教育に携わる学校教員、研究者らがさまざまな実践的教育研究を行い、それらを学会や全国レベルの研究会などで情報交換を本格的に行っている段階である。

そういう状況において、その情報発信の中心となっているのが、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（以下『特総研』と略す）である。平成27年9月現在、特総研の公式Webサイト<sup>1)</sup>では、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱その他9つの領域における教育に係る情報および特別支援教育全般に渡る教育情報がアップデートされているだけでなく、「特別支援教育教材ポータルサイト」「教育支援機器等展示室」「インターネットによる講義配信」など、数多くのコンテンツを有し、全国の特別支援教育に携わる者にとっての拠り所となっている。

平成25年度より、文部科学省が「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」を実施したが、その普及に当たり、平成26年7月に特総研Webサイトにて「インクルーシブ教育システム構築支援データベース」を開設し、インクルーシブ教育システムに関するさまざまな

情報提供等を行うとともに、本事業を通じて得られた合理的配慮等の実践事例をデータベース化し、掲載するなどの取組を始めた（青木<sup>2)</sup>, 2015)。特別な支援を必要とする子どもは、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校で、特性に応じた教育を受けている。一人ひとり異なる特性と個性があり、今まで以上に個々の教育的ニーズを踏まえて、「個別に必要な合理的配慮」を具現化して、指導・支援を充実していくことが大切になる（藤本<sup>3)</sup>, 2015)。このサイトには、インクルーシブ教育に係る実践事例や関連情報が随時更新されており、貴重な情報データベースとして認知・活用されるに至っている。

特別支援教育に係る情報は、何も文部科学省や特総研だけが提供している訳ではない。全国の特別支援学校の多くは、学校公式Webサイトにて、教育課程や学級編制、小・中・高等部の学びの様子などを公開している。さらに、学校公式Webサイトのなかで特別支援教育に係る指導上の情報をアップデートしているところもある（例えば、秋田県立秋田きらり支援学校<sup>4)</sup>、香川県立高松養護学校<sup>5)</sup>など）。筆者は、肢体不自由教育に係る授業において、これらの特別支援学校の公式Webサイトから、学生に有益と思われる情報をピックアップし、提供してきた。

なかには、特別支援教育に長く携わってきた教員が、個人Webサイトにて、教材・教具を中心に、授業の組み立て方など、かなり具体的な内容を公開しているというケースもある（例えば、毛塚<sup>6)</sup>, 2001；進<sup>7)</sup>, 1999など）。筆者自身も、2000年から2010年の間、個人Webサイトにて、動作法や心理リハビリテーションキャンプに関する情報提供を行っていたことがある（現在は閉鎖しているため、URL記載は控える）。当時はただ、自身が体験した動作法についての学びの成果をまとめただけのサイトであったが、それでも全国の動作法に興味・関心のある養護学校（現在の特別支援学校）の教員や、大学生、障害児をもつ保護者には好評で、毎月約1,000件～1,500件程度のアクセスがあったことを記憶している。

現在でこそ、特別支援教育にかかる書物や定期刊行物が当たり前のように書店に並び、興味・関心のある者にとっては気軽に情報を入手できるようになったとは言え、インターネットによる情報提供は、特別支援教育に携わる者、とりわけインターネットに慣れ親しんでいる若い世代には、まだまだ重要な情報ソースとして位置づけられている、と筆者は考えている。

本専攻で特別支援教育を学ぶ学生にとっても、同じことが言えよう。学生にとって、携帯情報端末（現在はスマートフォンやタブレットPCが主流かと思われる）は片時も手放すことのできない、まさに生活必需品となっている。学生の様子を見ると、授業中でもわからないキーワードを情報端末で調べたり、バズ学習場面において学習テーマに関連する事項を端末で検索し、お互いに端末の画面を見せ合いながら話し合ったりしている様子などを見るようになった。

大学の授業の進め方も、ここ数年で大きく変化した。近年、ICT（Information and Communication Technology）を活用した学習支援の報告が各分野よりなされている（辻・

稲葉・酒井<sup>8)</sup>, 2015)。本学でも、ICTを活用した教授－学習方法として、eラーニングに係る教員研修の機会が増えてきた。また、学内インターネット環境も随分整備され、授業においても、電子黒板をはじめとするICT機器が導入されてきた。筆者も、自身の授業のなかで、学生の手持ちの情報端末を使った双方向のコミュニケーションを試みたり、学生に提供したい情報（例えば、文字では伝達が困難な、肢体不自由児の歩行の様子が映っている動画など）を一斉配信メールに載せて、手で情報を閲覧しながら講義を聴けるような工夫を試みたりしている。

ところで、先に紹介した特別支援教育に係るインターネット上の情報ソースについては、当然特別支援教育関連科目の授業のなかでも紹介し、閲覧や学びの参考にするような指導はしてきた。しかしながら、学生の学びの様子やその成果としての試験・レポート課題などを見る限りでは、それらを積極的に活用しているようには思えない。特別支援教育にかかるインターネット上の情報ソースの多くは、主として現在特別支援教育に携わる者を閲覧・活用の対象にしており、本専攻で特別支援教育を学ぶ学生が主体的に情報収集を行い、その情報を体系的に学んでいくには敷居が高いのではないか、と愚考してならない。

そこで筆者は、これから特別支援教育を学ぶ学生を対象に、本学の授業科目内容とリンクした形の「教育支援データベース（ポータルサイト）」を作成し、当該の学生の主体的な情報収集および体系的な学習をより効果的に促進する教育プログラムを構築することを大きな目的とした。本研究では、そのための第1報（基礎研究）として、まず特別支援教育を学ぶ本学学生が、特別支援教育に係る学びをどのような形で行っているか、特に学びの過程において、インターネットをどのように活用しているのか、今後情報を提供していくうえで、どのような課題が潜んでいるのか、などについて、学生向けのアンケート調査により実態把握することを目的とした。

## 方 法

1. 被験者 本専攻で、平成26年度に開講された特別支援学校教員免許必修科目を履修する学生177名（1年次生：53名、2年次生：39名、3年次生：43名、4年次生：42名）。
  2. 調査時期 平成26年7月16日～7月31日
  3. 手続き アンケート冊子を作成し、被験者に無記名での回答を依頼した。
- 3-1. アンケートの構成とその作成過程 大きく「第1問：現在の自主学習の状況」「第2問：特別支援教育関連情報の入手経路」「第3問：現在持っている情報端末」「第4問：インターネットによる学習状況」「第5問：特別支援教育について入手したい情報」「第6問：インターネットの活用によりやってみたい学習方法」の枠組みを設け、それぞれに質問を作成した。
- 第1問：現在の自主学習の状況 「1週間あたりの特別支援教育の学習にかけている時間（自由記述式、単位：時間）」「特別支援教育の学習を主にする場所（選択式・複数回答可）」「特

別支援教育の学習内容（自由記述式）」についての質問を作成した。

**第2問：特別支援教育関連情報の入手経路** 授業で使用する教科書や図書館の在庫書籍、インターネットなどの選択肢を設け、そのなかから選択する形式（複数回答可）の質問を1問作成した。

**第3問：現在持っている情報端末** パソコン、タブレットPC、スマートフォンなどの選択肢を設け、そのなかから選択する形式（複数回答可）の質問を1問作成した。

**第4問：インターネットによる学習状況** まず、学内でのインターネットを用いた特別支援教育についての学習経験の有無を質問し、「ある」と回答した被験者に対して、引き続き「インターネットを使った場所（選択式、複数回答可）」「インターネットを使って行った具体的な学習内容（選択式、複数回答可）」「アクセスしたサイト（自由記述式）」「インターネットを活用して困ったこと（自由記述式）」についての質問を作成した。

**第5問：特別支援教育について入手したい情報** まず、特別支援教育について学習する際に、「こういう情報が欲しい」と思った経験の有無を質問し、「ある」と回答した被験者に対して、引き続き「具体的な欲しかった情報（自由記述式）」についての質問を作成した。

**第6問：インターネットの活用によりやってみたい学習方法** 特別支援教育について、インターネットを活用してやってみたい学習方法について、自由記述式の質問を1問作成した。

**3-2.質問紙調査の実施過程** 主に、筆者が担当する授業科目の第14講の授業時間を借用し、集団検査方式で質問紙調査を実施した。具体的な科目は、1年次生は「障害者教育総論Ⅰ」、2年次生は「肢体不自由者の心理・生理・病理」、3年次生は「肢体不自由者支援学」、4年次生は「特別支援学校教育実習事前事後指導」であった。いずれの学年（授業）においても、回収率は100%であった。ただし、被験者のなかには、時間割の関係で上記科目のうち複数を受講している者もいた。この場合は、一方の授業のみでアンケートに回答するように指導した。

## 結果

質問ごとに、結果の整理手順と得られた結果を記す。

**第1問：現在の自主学習の状況** 回答結果について集計した結果を以下に記す。学年ごとに結果を比較することが主目的ではないので、本稿

表1-1 1週間あたりの特別支援教育の学習にかけている時間

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答					
1時間未満	25 (47.2%)	17 (43.6%)	16 (37.2%)	11 (26.2%)	69 (39.0%)
1時間～2時間未満	17 (32.1%)	11 (28.2%)	12 (27.9%)	18 (42.9%)	58 (32.8%)
2時間～3時間未満	7 (13.2%)	3 (7.7%)	5 (11.6%)	1 (2.4%)	16 (9.0%)
3時間以上	4 (7.5%)	4 (10.3%)	6 (14.0%)	4 (9.5%)	18 (10.2%)
無回答	0 (0.0%)	4 (10.3%)	4 (9.3%)	8 (19.0%)	16 (9.0%)
合計	53 (100.0%)	39 (100.0%)	43 (100.0%)	42 (100.0%)	177 (100.0%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表1-2 特別支援教育の学習を主にする場所

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答					
自宅	38 (71.7%)	31 (79.5%)	31 (72.1%)	28 (66.7%)	128 (72.3%)
教室	16 (30.2%)	9 (23.1%)	16 (37.2%)	12 (28.6%)	53 (29.9%)
図書館	10 (18.9%)	5 (12.8%)	8 (18.6%)	9 (21.4%)	32 (18.1%)
ラウンジ	2 (3.8%)	1 (2.6%)	3 (7.0%)	0 (0.0%)	6 (3.4%)
学外	0 (0.0%)	2 (5.1%)	3 (7.0%)	1 (2.4%)	6 (3.4%)
自習室	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (4.7%)	1 (2.4%)	3 (1.7%)
食堂	2 (3.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (1.1%)
その他	1 (1.9%)	1 (2.6%)	3 (7.0%)	4 (9.5%)	9 (5.1%)
無回答	5 (9.4%)	3 (7.7%)	3 (7.0%)	0 (0.0%)	11 (6.2%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

では被験者全体（4学年分）を通じた結果を記すが、学年によって特記すべき点があった場合に限り、当該学年の結果を記すこととする。

「1週間あたりの特別支援教育の学習にかけている時間（自由記述式、単位：時間）」は、「1時間未満」が69名（39.0%）、「1時間以上2時間未満」が58名（32.8%）、「2時間以上3時間未満」が16名（9.0%）、「3時間以上」が18名（10.2%）、無回答が16名（9.0%）であった。学年別に見てみると、1～3年では「1時間未満」と回答した被験者の割合が最も多かったが、4年では「1時間以上2時間未満」と回答した被験者の割合が最も多かった（表1-1参照）。「特別支援教育の学習を主にする場所（選択式・複数回答可）」は「自宅」が128名（72.3%）と最も多く、次いで「教室」が53名（29.9%）、「図書館」が32名（18.1%）という結果であった（表1-2参照）。「特別支援教育の学習内容（自由記述式）」については、「授業の復習」という回答が58名（32.8%）と最も多く、次いで「レポート作成」という回答が37名（20.9%）、「課題学習」という回答が30名（16.9%）という順であった（表1-3参照）。

**第2問：特別支援教育関連情報の入手経路** 「教科書」と回答した学生が115名（65.0%）と最も多く、次いで「インターネット」が69名（39.0%）、「ボランティア体験」が64名（36.2%）、「図書館の本」が41名（23.2%）、「グリーンティーチャー」が33名（18.6%）、という結果であった。学年別に見てみると、1年では「図書館の本」と回答した被験者の割合が40%を超えていたことや、3年では「ボランティア体験」と回答した被験者の割合が60%を超えていたことが特徴的であった。また、「ボランティア体験」「グリーンティーチャー」について、下位学年（1～2年）と上位学年（3～4年）で回答率を比較してみると、どちらの項目も、上位学年の方が下位学年よりも顕著に高いことが窺えた（表2参照）。

**第3問：現在持っている情報端末** 「スマートフォン」と回答した学生が167名（94.4%）と最も多く、次いで「パソコン」が138名（78.0%）、「タブレットPC」が11名（6.2%）、「携帯電話」が8名（4.5%）という結果であった。（表3参照）

表1-3 特別支援教育の学習内容

学年 回答	1年	2年	3年	4年	合計
授業の復習	29 (54.7%)	12 (30.8%)	6 (14.0%)	11 (26.2%)	58 (32.8%)
レポート作成	1 (1.9%)	12 (30.8%)	15 (34.9%)	9 (21.4%)	37 (20.9%)
課題学習	1 (1.9%)	11 (28.2%)	10 (23.3%)	8 (19.0%)	30 (16.9%)
学習指導案作成	0	2	2	6	10
書籍購読	6 (11.3%)	1 (2.6%)	2 (4.7%)	0 (0.0%)	9 (5.1%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表2 特別支援教育関連情報の入手経路

学年 回答	1年	2年	3年	4年	合計
教科書	29 (54.7%)	26 (66.7%)	28 (65.1%)	32 (76.2%)	115 (65.0%)
インターネット	17 (32.1%)	17 (43.8%)	16 (37.2%)	19 (45.2%)	69 (39.0%)
ボランティア体験	11 (20.8%)	10 (25.6%)	26 (60.5%)	17 (40.5%)	64 (36.2%)
図書館の本	22 (41.5%)	5 (12.8%)	5 (11.6%)	9 (21.4%)	41 (23.2%)
グリーンティーチャー	0	4	17	12	33
書店購入	4 (7.5%)	6 (15.4%)	4 (9.3%)	4 (9.5%)	18 (10.2%)
新聞	6 (11.3%)	3 (7.7%)	4 (9.3%)	4 (9.5%)	17 (9.6%)
雑誌	0	2	1	1	4
その他	3 (5.7%)	2 (5.1%)	4 (9.3%)	4 (9.5%)	13 (7.3%)
無回答	1 (1.9%)	1 (2.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (1.1%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表3 現在持っている情報端末

学年 回答	1年	2年	3年	4年	合計
スマートフォン	48 (90.6%)	37 (94.9%)	41 (95.3%)	41 (97.6%)	167 (94.4%)
パソコン	36 (67.9%)	31 (79.5%)	35 (81.4%)	36 (85.7%)	138 (78.0%)
タブレットPC	3 (5.7%)	4 (10.3%)	3 (7.0%)	1 (2.4%)	11 (6.2%)
携帯電話	3 (5.7%)	2 (5.1%)	2 (4.7%)	1 (2.4%)	8 (4.5%)
その他	0	1	0	0	1
	0 (0.0%)	2 (2.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.6%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

**第4問：インターネットによる学習状況** 学内でのインターネットを用いた特別支援教育についての学習経験が「ある」と回答した被験者は41名（23.2%）、「ない」と回答した被験者は131名（74.0%）、無回答は5名（2.8%）であった。学年別に見てみると、1～3年では「ない」と回答した被験者の割合が圧倒的に多かったが、4年では「ある」「ない」の回答数が同数であった（表4-1参照）。

学習経験が「ある」と回答した被験者に対して、引き続き「インターネットを使った場所」「インターネットで学習した内容」「アクセスしたサイト（自由記述式）」「インターネットを活用して困ったこと（自由記述式）」、以上4項目を尋ねた。その結果、「インターネットを使った場所」については、「**耕学館・情報処理室**」が23名（13.0%）と最も多く、次いで「**自身の情報端末**」が17名（9.6%）、「**図書館**」が5名（2.8%）の順であった。学年別では、4年で「**情報処理室**」と回答した被験者の割合が目立った（表4-2参照）。「インターネットで学習した内容」については、「**授業レポート**」が22名（12.4%）と最も多く、次いで「**学習指導案作成**」と「**授業の復習**」がそれぞれ16名（9.0%）の順であった。学年別に見てみると、1年では「**授業の復習**」と回答する被験者の割合が最も多かったが、3～4年では「**授業レポート**」や「**学習指導案**」と回答する被験者の割合が大きかった（表4-3参照）。「**アクセスしたサイト**」については、2名以上の回答があったのが、「**文部科学省Webサイト**（6名、3.4%）」と「**CiNii**（2名、1.1%）」だけであった（表4-4参照）。「インターネットを活用して困ったこと」についても同様で、2名以上の回答があったのは、「**目的の情報が**

表4-1 学内でのインターネットを用いた特別支援教育についての学習経験の有無

学年	1年	2年	3年	4年	合計
ある	6 (11.3%)	4 (10.3%)	10 (23.3%)	21 (50.0%)	41 (23.2%)
ない	47 (88.7%)	32 (82.1%)	31 (72.1%)	21 (50.0%)	131 (74.0%)
無回答	0 (0.0%)	3 (7.7%)	2 (4.7%)	0 (0.0%)	5 (2.8%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表4-2 インターネットを使った場所

学年	1年	2年	3年	4年	合計
耕学館・情報処理室	1 (1.9%)	3 (7.7%)	4 (9.3%)	15 (35.7%)	23 (13.0%)
自身の情報端末	5 (9.4%)	2 (5.1%)	3 (7.0%)	7 (16.7%)	17 (9.6%)
図書館	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (7.0%)	2 (4.8%)	5 (2.8%)
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (4.8%)	2 (1.1%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表4-3 インターネットで学習した内容

学年	1年	2年	3年	4年	合計
授業レポート	1 (1.9%)	2 (5.1%)	6 (14.0%)	13 (31.0%)	22 (12.4%)
学習指導案の作成	0 (0.0%)	3 (7.7%)	5 (11.6%)	8 (19.0%)	16 (9.0%)
授業の復習	5 (9.4%)	1 (2.6%)	0 (0.0%)	10 (23.8%)	16 (9.0%)
授業の予習	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	2 (1.1%)
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (4.7%)	1 (2.4%)	3 (1.7%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表4-4 アクセスしたサイト

学年	1年	2年	3年	4年	合計
文部科学省Webサイト	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	6 (14.3%)	6 (3.4%)
CiNii	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (4.8%)	2 (1.1%)
その他	3 (5.7%)	0 (0.0%)	1 (2.3%)	4 (9.5%)	8 (4.5%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表4-5 インターネットを活用して困ったこと

学年	1年	2年	3年	4年	合計
目的の情報が 見つかりにくい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (7.1%)	3 (1.7%)
検索キーワードが わからない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (4.8%)	2 (1.1%)
用語が難しすぎる	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.3%)	1 (2.4%)	2 (1.1%)
サイトによって 情報が異なっている	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	2 (1.1%)
その他	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (9.5%)	5 (2.8%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

的の情報が見つかりにくい(3名, 1.7%)」「検索キーワードがわからない(2名, 1.1%)」「用語が難しすぎる(2名, 1.1%)」「サイトによって情報が異なっている(2名, 1.1%)」だけであった。(表4-5参照)

#### 第5問：特別支援教育について入手したい情報

特別支援教育について学習する際に、「こういう情報が欲しい」と思った経験が「ある」と回答した被験者は63名(35.6%)、「ない」と回答した被験者は105名(59.3%)、無回答は8名(4.5%)であった。経験が「ある」と回答した被験者に対して、引き続き「具体的な欲しかった情報」について尋ねた。その結果、「教師の指導の実態」という回答が11名(6.2%)と最も多く、次いで「学習指導案の例」という回答が7名(4.0%)、「現場(特別支援学校)の様子」という回答が6名(3.4%)という順であった。

**第6問：インターネットの活用によりやってみたい学習方法** これについては、筆者は特別支援教育についての学習方法を尋ねたつもりであったが、被験者の多くは「インターネットで閲覧したい情報」を回答していたようであった。閲覧したい情報については、第5問と同じく、

「障害特性に係る情報(5名, 2.8%)」や「ボランティア情報(4名, 2.3%)」などの回答があった。学習方法に特化して回答を見てみると、ごくわずかではあるが、「問題演習がしたい(3名, 1.7%)」「ネットを活用して授業を参観したい(1名, 0.6%)」「アンケート調査がしたい(1名, 0.6%)」「障害児(者)とネットを介してかわりしたい(1名, 0.6%)」「学習方法を学びたい(1名, 0.6%)」といった回答が見られた。

## 考 察

質問ごとに、得られた結果をもとに考察する。

**第1問：現在の自主学習の状況** 学生の70%以上が、特別支援教育の学習にかかる時間が1週間あたり「1時間未満」「1時間以上2時間未満」と回答するという、特別支援教育を指

表5-1 特別支援教育について学習する際に「こういった情報が欲しい」と思った経験の有無

学年 回 答	学 年				合計
	1年	2年	3年	4年	
ある	15	9	20	19	63
	(28.3%)	(23.1%)	(46.5%)	(45.2%)	(35.6%)
ない	34	27	22	22	105
	(64.2%)	(69.2%)	(51.2%)	(52.4%)	(59.3%)
無回答	3	3	1	1	8
	(5.7%)	(7.7%)	(2.3%)	(2.4%)	(4.5%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表5-2 具体的な欲しかった情報

学年 回 答	学 年				合計
	1年	2年	3年	4年	
教師の指導の実態	2	0	6	3	11
	(3.8%)	(0.0%)	(14.0%)	(7.1%)	(6.2%)
学習指導案の例	0	0	2	5	7
	(0.0%)	(0.0%)	(4.7%)	(11.9%)	(4.0%)
現場(特別支援学校)の様子	1	0	1	4	6
	(1.9%)	(0.0%)	(2.3%)	(9.5%)	(3.4%)
障害児の実態	1	1	3	0	5
	(1.9%)	(2.6%)	(7.0%)	(0.0%)	(2.8%)
障害特性に係る情報	3	1	1	0	5
	(5.7%)	(2.6%)	(2.3%)	(0.0%)	(2.8%)
ボランティア情報	0	1	4	0	5
	(0.0%)	(2.6%)	(9.3%)	(0.0%)	(2.8%)
その他	8	5	13	10	36
	(15.1%)	(12.8%)	(30.2%)	(23.8%)	(20.3%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

表6 インターネットの活用によりやってみたい学習方法

学年 回 答	学 年				合計
	1年	2年	3年	4年	
障害特性に係る情報	2	2	1	0	5
	(3.8%)	(5.1%)	(2.3%)	(0.0%)	(2.8%)
ボランティア情報	3	0	1	0	4
	(5.7%)	(0.0%)	(2.3%)	(0.0%)	(2.3%)
専門用語	2	0	1	0	3
	(3.8%)	(0.0%)	(2.3%)	(0.0%)	(1.7%)
授業の様子(動画)	0	2	0	1	3
	(0.0%)	(5.1%)	(0.0%)	(2.4%)	(1.7%)
問題集(問題演習)	2	0	1	0	3
	(3.8%)	(0.0%)	(2.3%)	(0.0%)	(1.7%)
その他	8	2	9	4	23
	(15.1%)	(5.1%)	(20.9%)	(9.5%)	(13.0%)

※上段：回答件数、下段：学年ごとの被験者数における回答件数の割合

導する立場から見ると非常に憂える事態であることがわかった。入学して間もなく、特別支援学校教員免許必修科目の数が前後期とも1週間あたり1科目しかない1年生ならば致し方ないところもあるかと思うが、2～3年生は免許必修科目数が前後期とも1週間あたり3科目程度あるはずで、それにもかかわらずこの学習時間の少なさは、特別支援学校教員免許を目指すものとしてはいかなものかという気がする。

学習場所については、自宅が圧倒的に多いのだが、自宅に十分な（紙媒体の）学習用資料が置いてある訳ではないだろうから、学習していて疑問に感じたことなどをどのように解決しているのかが気付きである。

特別支援教育の学習内容については、授業に係るものが非常に多かった。特別支援教育の領域は非常に幅広く、またその内容は膨大であるため、特別支援学校の教員免許を目指すのであれば、もっと自らがさまざまな方法を駆使して学習に励んでもらいたいのが筆者の偽らざる気持ちであるが、一方で、学生からは「授業についていっただけでも精一杯」という声が出ているのも実情である。今回の結果は、それを裏付けているように思われる。

**第2問：特別支援教育関連情報の入手経路** 先述の第1問の回答と重ねあわせると、おそらく、学生の学習方法は、授業の前後に、自宅で手元の教材・資料を見返す程度の学習に留まっているのではないかと推察される。ただし、上位学年では、グリーンティーチャーやボランティア体験などで、障害児と直接かかわる機会が増え、それまでの机上の学習とのリンクができるようになる模様である。さらに、特別支援教育の授業科目のなかで、学習指導案を作成する機会が増えるため、それを調べるために、インターネットをはじめ、さまざまな手段で学習指導案の作成に勤しんでいる様子も窺える。

**第3問：現在持っている情報端末** 平成27年10月16日付毎日新聞にも記事「パソコン使えない若者、増加」が掲載されていたが、今時の若者は、自分のパソコンを持っている、もしくは自宅にパソコンがあるにもかかわらず、筆者世代が予想している以上にパソコンに慣れ親しめていない。筆者の研究室でも、レポート作成のためにパソコンを購入したものの、ワープロソフトはかろうじて使えるが、表計算ソフトは「使ったことがない（本当は高等学校の情報教科や本学の「情報処理演習」などで学んでいるはずだが…）」という学生は多い。インターネットの使用も、パソコンよりも手持ちのスマートフォンでアクセスする方が得意な学生ばかりである。スマートフォンでWebサイトにアクセスすると、画面が小さいためか、映しだされた文字を読むのが大変である。そういう背景もあるのか、学生はインターネットの活用は筆者世代以上にしているはずにも関わらず、インターネットを介して収集できる情報は少ないように見受けられる。

**第4問：インターネットによる学習状況** 前述の内容と重複するが、自身のプライベートライフを豊かにするために携帯情報端末を駆使する学生世代には、学習のためにパソコンでインターネットを活用するというに馴染みがあるとは言えない。本学には情報処理室や図

書館など、インターネットを活用した学習を行うには十分な環境があるが、それぞれの施設に立ち寄ってみても、パソコンを使用している学生の姿をあまり見かけないのは残念で仕方がない。

また、インターネットで学習した内容の多くは、学生がそれぞれの授業で指示され、「必要に迫られ」て取り組んでいる内容であり、自らが進んで調べ学習をしている様子は窺えない。それでも、卒業を控えた4年生のなかに、文部科学省公式Webサイトや（おそらく文献検索目的とおもわれるが）CiNiiにアクセスしている学生がいることはいいことだと思う。

もちろん、学生がインターネットを活用した学習スキルを持っていないことの原因は、学生自身のみにある訳ではない。「インターネットを活用して困ったこと」の回答からは、特別支援教育ならではの難しさというのが推察される。

まず、特別支援教育は比較的新しい領域である。学校教育法<sup>9)</sup>の改正により、それまでの特殊教育から特別支援教育へと生まれ変わったのは平成19年（2007年）のことであり、現在までまだ10年も経過していない。その10年弱のなかで、障害児に対する教育の有り様も大きく変わり、さまざまな概念や用語が生まれている。特別支援教育に携わる者でもその変化を理解し、追従するのが難しいのが現状である。特別支援学校教員免許を目指して間もない学生が混乱するのも致し方ないところがあり、だからこそ、日頃の授業のなかで一つひとつの概念や用語などを丁寧に伝えていく必要があるだろう。そうでなくても、学生の大半は小・中・高等学校を経て本学に入学した者であり、すなわち特別支援学校や小・中・高等学校の特別支援学級に在籍した経験のない者である。表現を変えれば、特別支援教育に対するリアリティがない状態で、特別支援学校教員免許を目指している訳である。特別支援教育には、小・中・高等学校教育とは異なる発想をもって教育・指導に臨まないといけない部分もあるため、学生が小・中・高等学校での体験を抛り所に特別支援教育を学ぼうとすると、なかなか理解ができない部分も少なくない。用語の難しさやキーワードの思いつかなさ、提示情報の多様性は、そのあたりにも原因があるように思える。

**第5問：特別支援教育について入手したい情報** この回答からは、特別支援教育に係る情報収集のニーズがけっして低くないことが窺える。先述したように、学生は自身が特別支援教育を受けた経験がほぼ皆無である。座学だけでは、障害児の実態把握や教育場面の理解・イメージ化が困難である。また、特別支援学校学習指導要領等にもあるように、特別支援教育の授業は、「子どもの実態に応じて」「柔軟に」行うことが求められているため、実に多岐に渡っている。大学の授業で紹介できる授業内容は限られてしまうため、より多くの特別支援学校での様子を知りたいというのは当然のことと思われる。この傾向は、教育実習が近づく上位学年になるほど高くなっている。3年・4年の方が、特別支援学校のさまざまな実情や教師の指導実態、そして指導の設計図となる学習指導案に係る情報を求めている。また、文字情報としての情報提供だけでなく、動画による情報提供に対するニーズも高いことが特徴

的と言えよう。もともと、学生の世代は画像および動画による情報提供の方が、文字による情報提供よりもニーズが高いものだが、単にそのファクターだけでなく、特別支援教育特有のイメージの難しさがあるように思われる。

また、障害児と直接かかわれるボランティア活動へのニーズが高いことも窺える。本学でも、障害児のためのサマースクール他、いくつかの学生ボランティアの募集が学生課掲示板に貼られているが、さらに幅広く探しているものと推察される。

第6問：インターネットの活用によりやってみたい学習方法 閲覧したい情報については第5問にて考察したので、ここでは省略をする。

学生の日常生活を見ていると、携帯情報端末を駆使して、インターネットで双方向的活用をしている場面に出会うことがある。LINEやSkypeなどコミュニケーションツールや、音楽・動画視聴やゲームなどについては、学生自身は当たり前のように双方向的なネット活用をしている。けっして情報端末からの一方的な受信ではない。それを踏まえると、ネットを活用した学習場面においても、よりアクティブな活用の仕方を思いついても不思議ではないはずである。

大学の授業そのものも、ここ最近大幅に変わってきた。例えば、情報端末の普及と連動する形で大学の教育活動に「反転授業」なるものを試験的に導入し、その有効性を検討するところも出てきはじめた（小川<sup>10)</sup>,2015)。また、クリッカー（レスポンス・アナライザー）を導入し、授業の活性化を試みる大学も増えてきた（田島<sup>11)</sup>,2015)。本学でも、学習支援システム「WebClass」というサービスが提供されており、学生のラーニングマネジメントができる仕組みになっている。こういったICTは、提供する側と受講する側とが忌憚のない意見交換をしながら、その質を高める必要があるだろうが、本学の学生については、まず「このような学習の仕方が学内外でできるのだ」ということをデモンストレーションし、その上で、学生の視点からみた学びの上での課題を見出させる形式が現実的ではないかと考える。

## ま と め

本研究では、特別支援教育を学ぶ本学学生のための教育支援データベースを開発するための基礎研究として、学生の学習過程におけるインターネットの活用の実態や、インターネットを活用する上での学習ニーズについて、アンケート調査を実施した。調査結果を概観するなかで、学生の学習状況や学習ニーズには興味ある特徴が見出せた。それを以下に箇条書きで記す。

- ・学生自身が特別支援教育を受けた経験がほぼ皆無であるため、障害児の実態把握や教育場面の理解・イメージ化が困難であること。（障害をテーマにした動画や放送番組および近郊の障害者支援活動に対するニーズが多いこと）
- ・学生がネットによる情報検索を試みるときに適切なキーワードが思いつきにくいこと。

・上位学年では、公的機関の記事や学習指導案データベースなどへの検索を積極的に試みるものの、自身のニーズを十分に満たせる「よい記事(情報)」なのかどうかの判断が難しいこと。

この結果と特別支援教育に係る授業で配布・紹介している資料をもとに、学生に提供すべきコンテンツと情報提示の仕方、授業とのリンク方法を検討し、データベースの試作に入ることとする。

当初、データベースの作成に当たっては、①文科省・特別支援総合研究所などの公的機関、②福岡県近郊の特別支援学校、③特別支援教育学校教員が運営する個人サイト、④参考図書で紹介、放送教材・動画サイトなどへのリンクを想定していた。今回の調査結果を踏まえると、⑤特別支援教育特有のキーワードや情報検索のためのヒント、⑥学生自身の地域における活動情報、なども織り交ぜ、単なる大学教員側からの情報提供にとどまらず、学生自身からの情報提供にも対応できるものを作ることが重要であり、本学学生向けというオリジナリティが出せるデータベースが構築できるのではないかと思われる。

ただし、学生のニーズのなかには、個人情報の保護および守秘義務の観点から、情報ソースを探すことが難しいものもある。例えば、特別支援学校の授業の様子や児童・生徒の様子などは、市販されている視聴覚教材に限られるため、題材を探すことや学生に示すことは不可能である。インターネットが普及した現在だからこそ、情報の入手が簡単にできないものもある、ということ、学生には理解してもらいたいし、そのような形で特別支援学校に通学する児童生徒のプライバシーを守ることも教育の一環であることを理解させなくてはならないと筆者は考える。

## 注

本研究は、平成26年度九州女子大学研究支援プログラムに係る特別研究費の助成を受けて行った研究の一部である。

## 引用・参考文献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所公式Webサイト, <http://www.nise.go.jp/cms/>, 最新アクセス日: 2015/10/31
- 2) 青木隆一 (2015). 高等学校におけるインクルーシブ教育システム構築支援データベースの活用:視覚障害のある生徒への活用例 (特集 インクルーシブ教育システム構築支援データベース (インクルDB) の活用), 特別支援教育, 東洋館出版社, 第57巻, pp.24-27
- 3) 藤本裕人 (2015). インクルーシブ教育システム構築に関わるデータベースの活用と検索方法について (特集 インクルーシブ教育システム構築支援データベース (インクル

- DB) の活用), 特別支援教育, 東洋館出版社, 第57巻, pp.8-11
- 4) 秋田県立秋田きらり支援学校公式Webサイト, <http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/kirari/>, 最新アクセス日: 2015/10/31
  - 5) 香川県立高松養護学校公式Webサイト, <http://www.kagawa-edu.jp/takayo01/>, 最新アクセス日: 2015/10/31
  - 6) 毛塚 滋 (2001). 「特別支援学校の授業に役立つ自作創作教材」, <http://www.asahi-net.or.jp/~ue6s-kzk/>, 最新アクセス日: 2015/10/31
  - 7) 進 輝代 (1999). Leeの特別支援教育, <http://www.geocities.jp/leeobaatyan/>, 最新アクセス日: 2015/10/31
  - 8) 辻 靖彦・稲葉利江子・酒井博之 (2015). 日本国内の大学における授業のICTツールの利用傾向と利用目的 (学習支援環境とデータ分析/一般), 日本教育工学会研究報告集 第15巻第1号, pp.127-130
  - 9) 文部科学省初等中等教育局 (2006). 特別支援教育の推進のための学校教育法等の一部改正について (通知), 平成18年3月31日付, 18文科初第446号
  - 10) 小川 勤 (2015). 反転授業の有効性と課題に関する研究: 大学における反転授業の可能性と課題, 大学教育, 山口大学大学教育機構, 第12巻, pp.1-9
  - 11) 田島貴裕 (2015). クラウド型クリッカーの活用事例とその運用課題—スマートデバイスに対する大学生の意識の観点から—, コンピュータ&エデュケーション, コンピュータ利用教育学会, 第38巻, pp.62-67

## Development of “educational support database” for university students of special education (Part 1)

Koji HORIE

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,  
Kyushu Women’s University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### Abstract

The author carried out questionnaire survey about the actual situation and the needs of the utilization of the internet in the learning process of KWUC students, as a fundamental research to develop the educational support database for the students who are learning the special education.

As a result of investigation, the learning situation and the learning needs of the students were able to find the following points. 1) The students feel the difficulty of making the understanding the reality of handicapped children and the image of actual situation in the special education, because they have little experience of special education. (Therefore, they have many needs of the videos and TV programs on the theme of handicapped children, they want the information on volunteer activities for handicapped children.) 2) When students search for information of the special education on the internet, they are hard to come up with a keyword. 3) The higher school year students actively search the articles public institutions issued and the databases of the learning teaching plan, but they can not determine whether the information which they found fit to their needs.

keywords : the educational support database, special education, internet, university students